

特別支援学校におけるESDを展望した教育実践

～生活単元学習における花壇づくりの活動を通して～

谷村佳則

Educational Practice Prospected for ESD in Special Needs Education School

～ Through the Activity of Making Flower Bed as Life Unit Study ～

TANIMURA Kazunori

キーワード：ESD エンパワメント 生活単元学習 教育環境づくり 社会生活力

概要：2005年12月27日、「国連持続可能な開発のための教育の10年」に係る施策の実施について、関係行政機関相互間の緊密な連携を図り、総合的かつ効果的な推進を図るため、内閣に關係省庁連絡会議（以下、「連絡会議」という。）が設置された。この連絡会議を通して、2006年3月30日に「我が国における『国連持続可能な開発のための教育の10年』実施計画」が決定され、「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development）、略称ESD」（以下、ESDという。）の基本的な考え方が明記された。このESDの考え方は、2008年3月告示の学習指導要領（高等学校及び特別支援学校は2009年3月告示）においても、各教科等の目標や内容に取り入れられている。本稿は、2007年度に岩手大学教育学部附属特別支援学校中学部で取り組んだ、生活単元学習の教育実践の取り組みを紹介するとともに、その成果を基に、ESDを展望して児童生徒に育てていきたい力と教育支援の在り方について考察する。

1. はじめに

特別支援教育では、精神発達が未分化な児童生徒に対しては、指導内容を教科別又は領域別に分けて指導するよりも、総合的に組織された学習活動が適合しやすいため、教科別、領域別に分けない指導である「領域・教科を合わせた指導」（以下、「合わせた指導」という。）の形態が大切にされている。この合わせた指導の一つに「生活単元学習」がある。生活単元学習は、児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決するために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際の・総合的に学習するものである。

特にも、知的障がい教育では、生活に結びついた实际的で具体的な活動を学習活動の中心に据え、实际的な状況下で指導することを通して、学習に主体的に取り組む力を育てることを重視しているため、生活単元学習は社会生活力を育んでいく上で大切な学習である。

連絡会議における、「わが国における『国連持続可能な開発のための教育の10年』実施計画」では、ESDを進めていくための基本的な考え方として、「私たち一人ひとりが、世界の人々と将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、行動を変革することが必要であり、そのための教育がESDです。」と述べている。また、ESDの目標として、以下の3点も述べている

- 1 すべての人が質の高い教育の恩恵を享受すること。
- 2 持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれること。
- 3 環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすこと。

さらに、ユネスコ（UNESCO）によれば⁽¹⁾、「ESDが全体として目指すのは、積極的な環境的及び社会的な変革を実践するために、参加型・行動

志向型のアプローチを伴いながら、市民をエンパワーする⁽²⁾ことである。」と述べている。

以上から、ESDの基本的な考え方及び目標は、前述した特別支援教育における生活単元学習が目指すべき学習内容と同じ目的意識に立つとともに、目的の達成に向けて児童生徒をエンパワーしていくことが大切であると考ええる。

そこで本稿では、筆者が在職した岩手大学教育学部附属特別支援学校における生活単元学習の教育実践である、花壇づくりの活動事例の成果を通して、ESDを展望しながら児童生徒に育みたい力と教育支援の在り方について考察していくことにする。

2. 単元設定の理由

岩手大学教育学部附属特別支援学校では、2005年度から2007年度までの3年次計画で、研究主題「個々の教育的ニーズにこたえ、社会生活力を育み支援していくための授業実践－エンパワメントを生かした授業づくりを通して－」⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾に取り組んできた。

本研究では、エンパワメントを「個々の力を最大限発揮していくための環境づくりと支援の展開」と、とらえた。エンパワメントを生かした授業づくりに当たっては、次の二つの視点を大切にすることとした。

- 1 個別のニーズを探り出し、学習の主体者である児童生徒が力を発揮できるような環境を整えることで、主体と環境の相互関係性の観点に立って考える。
- 2 児童生徒を取り巻く周辺環境の条件整備に努めることで、適切な教育環境づくりを考案し、児童生徒が社会の中で主体的に活動することができるように支援を行う。

また、教育環境として社会的環境、人的環境、物理的環境の三つを設定し、社会的環境が人的環境と物理的環境を包括する形で構成することとした。

以上の本研究を受け、生活単元学習「きれいにしよう！蝶ヶ森～花壇をつくろう～」は、研究3年次目である2007年度に中学部の全生徒、職員で取り組んだ単元である。

本校のある盛岡市東安庭地区は、自然が豊かである。その中に「蝶ヶ森」(標高229m)という、地域の方々も遠足や散歩などで訪れる山がある。中学部でも、日頃から体育の授業などで足を運んでおり、馴染みの深い場所である。その山頂の展望台付近をきれいに整備してほしいという要望が、地域の方々から盛岡市役所に出されていた。その話を生徒に伝えたら、親しんできた蝶ヶ森をより美しく整備していくために、中学部全員が一丸となって取り組んでいきたいという意見が出た。その後、生徒の自発的な意見を地域の町内会長さんに伝えたと、町内会長さんが盛岡市役所に連絡してくださり、蝶ヶ森の整備に向けた許可をいただくことができたのである。整備の主な活動内容は、花壇の設置であるが、これは「花がたくさんあれば、きれいになる。」という、ある生徒の思いのこもった発言から取り入れた活動である。そのため、花壇用の杭の製作、草取り、土作りなど、働く活動が中心となる。授業の作業学習で行っている、作業製品を製作し販売することで売上金などの収入を得るための労働ではないが、日頃から訪れている場所が、自分たちの力で美しく変わっていく様子は、作業の見通しがもちやすく、働くことのやりがいや生きがいといった活動への意欲につながるものと考えた。そして、地域の方々にも喜んでもらえるような価値のある仕事に取り組むことで、生徒の主体的な姿と社会生活力の育みが期待できるものと考えたのである。

3. エンパワメントを生かした授業づくりと授業実践

(1) 教育環境の整備と支援の展開について

本単元の活動は、活動内容及び活動場所から、校舎のクラフト室で作業を行う「花壇杭作りグループ」と、屋外の蝶ヶ森山頂で作業を行う「花壇作りグループ」、「柵作りグループ」の3グループに分かれて進めていくことにした。

次頁の図は、花壇杭作りグループを中心に、環境づくりと支援方法についてまとめたものである。

【社会的環境】(学校、蝶ヶ森、地域の商店、町内会、市役所、活動センター、家庭等)	
○学校所在地である東安庭地域の有する自然環境、店舗、町内会といった様々な社会資源を実際的に活用できるようにし、学校内だけにとどまらない社会的環境を、生徒たちの活動舞台のテーマとして設定する。このことで、社会とのつながりを直接的に感じることのできる、より現実味のある生活を送り、自分たちの活動に対する誇りややりがいをもてるようにする。	
【人的環境】 (教師、町内会の方、市役所職員) ○激励や称賛の声掛けを行い、意欲的に時間いっぱい活動に取り組むようにする。 ○同一作業種のグループ編制により、間近で同じ作業を行う仲間、教師の姿を見て影響を受け、意欲を高めるようにする。 ○町内会長、盛岡市役所職員といった外部の方とのかわりにより、活動に対する意欲を高めるようにする。 ○必要に応じ近くの店を利用し、実際の買い物を行う。 ○花壇杭ユニット製作の進行状況等を話題にしながらか、意欲的な取り組みができるようにする。 ○写真入り通信を毎日発行し、保護者や他学部の職員にも活動内容と生徒の主体的な姿を伝えるようにする。 ○全員で蝶ヶ森に登って進捗状況を見る機会を設けたり、蝶ヶ森で活動するグループが出入りする場所を、校内で活動する杭作りグループの場所の側にするなど、違うグループであってもお互いの活動が分かるようにする。	【物理的環境】 (教材・教具、場の設定) ○大きく力を入れてものこざりがはずれないような補助具を使用し、安全に一人で芯材を切ることができ、自信をもって活動に取り組むことができるようにする。 ○お互いの活動の様子が見分かるような場の設定を行う。仲間とともに頑張って活動しようという意識をもつことができるようにする。 ○一人でユニットの組み立てができるような補助具を活用する。 ○組み立てに使う材料をとりやすいような場の工夫をする。 ○必要に応じて近くの店を利用し、買い物を行う。 ○自然の中という広い活動の場で、作業量が十分にあることを生かし、仕事が途切れて意欲が落ちることがないようにする。反対に、広い場であることで活動が難しくなる場合には、展望台やブルーシートなどを活用してエリアを分け、活動の場を分かりやすく示す。

図 環境づくりと支援方法 (花壇杭作りグループ)

(2) 授業実践の様子

次々頁の資料は、授業実践の取り組みの様子を、実際の写真と併せてまとめたものである。

4. 生徒の姿からみる社会生活力の育みと支援の手立ての検証

(1) 生徒の姿からみる社会生活力の育みの検証

中学部では社会生活力を、「人とかかわりの中で、様々な活動に目的や役割をもち、充実感を感じながら、自分の力を発揮して進んで行動する力」と、とらえた。

さらに、これを受けて、生徒が発揮してほしい力として、①「人とかかわる力」、②「自ら行動する力」、③「社会資源を活用する力」の3点を設定した。

ここでは、この三つの力を中心に、実際の生徒

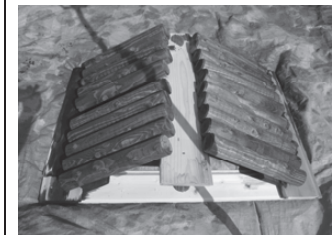
の活動を振り返りながら社会生活力の育みについて検証していくことにした。

① 【人とかわる力に関して】

- ・建材店での買い物では、店舗の人にきちんとあいさつをすることができた。また、支払いの際には、一人で代金を支払い、領収書を受け取ることができた。
- ・クローバーの種を購入する際に、店舗の人に適切なあいさつや、「クローバーの種をください。」と、買い物の目的を伝えることができた。
- ・盛岡市役所公園みどり課の職員が見に来た際には、自ら「ありがとうございます。」とあいさつをすることができた。また、自分の活動に喜びを感じ、芯材を切る速度を速めるなど、主体的な取り組みを行うことができた。
- ・町内会長さんが訪れると、「会長さん来た。」と



蝶ヶ森山頂の展望台は、盛岡市内を一望できる場所にあり、町内の方々の憩いの場となっている。学校からも近い場所にあり、本校の生徒が訪れることも多い。この地域の財産をもっと有効に活用するためには整備が必要であるという地域の声と、同じくきれいにしたいと日々感じていた生徒や教師の思いから、この場所の整備に取り組むこととした。町内会長さんが市役所に連絡していただき、花壇と柵の設置を許可していただくことができた。



生徒のこれまでの様子を踏まえ、「花壇杭作り（花壇用の連結杭の製作）」、「花壇づくり（土作り及び花壇の設置）」、「柵作り（市有地と私有地との境界柵の設置）」の3グループに分かれて活動することとした。5本の杭を連結させ、それらを埋め込んで花壇を作ることとした。材料に鉢カバーでも使用した芯材を用いることで、生徒それぞれにあった工程や補助具の工夫など、物理的環境の整備ができると考えた。盛岡市グリーンバンクより材料費を助成していただいた。



長い丸棒を切る、5本ずつ連結させる、防腐剤に漬ける、乾燥させるという作業が繰り返し必要となる。昨年度の授業実践において「一定期間繰り返す」という活動による生徒の力の発揮が成果としてみられており、豊富な作業量がある工法を選択しようと考えた。

電動工具の操作に興味・関心のある生徒にはより安全に、そして正確に仕事ができるような物理的環境の整備を行った。



防腐剤やネジ、クローバーの種などを購入した。どれも必要に応じて行うことで、より主体的に取り組むことができた。実際の店舗の利用により、コミュニケーション、歩行、マナー、商品を探す、支払うといった力も育まれた。

豊かな自然とともに、こうした商店が近くにあるという利便性も東安庭地域の環境の良さであり、自然な形で様々な地域の社会資源を活用することができた。今回の単元では、こうした社会資源を活用できるようなテーマ設定を、社会的環境の整備としてとらえた。



花壇杭は校内の作業室で製作した。出来上がった花壇杭は、体育の時間を利用してみんなで蝶ヶ森の山頂まで運ぶこととした。普段、学校で活動している「杭作りグループ」のメンバーは、こうした機会に山頂で活動する他のグループの様子、作業の進捗状況を確認することができた。山頂までの行き帰りにおいて、地域の方々と出会い、あいさつを交わした。活動内容を知っていただく機会となり、励ましの言葉もいただいた。



山頂で活動する花壇グループは、土作りに取り組んだ。土を混ぜ合わせる、石や根を取り除く、ふるいにかけるなどの活動を、一人一人に役割を分担して繰り返した。足を使った動作が得意な生徒には、足踏み式の缶つぶし機を改良した土ふるい機を使用することとした。

この日、応援に駆けつけてくださった町内会長さんと一緒に土をふるいにかけた生徒は、緊張しながらも意欲的に取り組んでいた。

資料 授業実践の取り組みの様子

	この花壇づくりグループは、作業に対する見通しをもち、得意な活動に取り組んでほしいという願いから、中学部作業学習「園芸班」に所属し、土作りや花植えを経験してきている生徒を中心としたグループで活動することとした。また、一人一人のエリアを決め活動しやすいような場の設定を行った。 盛岡市役所公園みどり課の職員の方が来て、作業の様子を見学した。働く生徒に向けて感謝の言葉を述べてくださった。
	蝶ヶ森山頂には、私有地と盛岡市の管理する土地との境界線があり、そこに柵を設置することとした。花壇杭と同じ材料で作った長い杭を使用した。穴を掘り、長い杭を打ち込んでいく活動を繰り返す。ダイナミックな活動を得意とする生徒にとっては、生き生きとした取り組みができた。穴掘り機や掛矢のような、普段使ったことのない道具の使い方を覚えて、作業に取り組むことができるようになった生徒もいた。
	約30メートルにわたって打ち込んだ杭を、最後に1本のロープを通してつなぐことで達成感が得られるものと考えた。端の杭まで通すという見通しをもつことのできたある生徒は、先頭に立ってどんどんとロープを通していった。最後に町内会長さんが結び目を作ってくくださった。 人的環境として、町内会長さんや盛岡市役所の職員の方といった、学校外の方々とのかかわり合いをもてたことにより、期待に応えたいという気持ちをもつことができた生徒もみられた。
	完成した花壇に花を植える活動には、中学部の全生徒がかかわるようにし、達成感が得られるようにした。これまで学校で花壇杭を作ってきた生徒にとっても、自分たちの活動の成果が感じられる瞬間であった。 ラベンダーなどの花の苗を一人一人が植え、水遣りを行った。この後も蝶ヶ森に水をもって訪れ、水遣りや雑草取りを行った。今後の管理も大切な役割となってくる。
	町内会長さんのアイデアで、花壇周辺にはクローバーを植え、一面を緑にすることとした。発芽のためには土を軽く耕し、雑草を取る作業が重要な仕事となる。山頂で活動したグループは、草取り作業にも取り組んだ。畑のように抜いてはいけない苗や花がないため、分かりやすく主体的に取り組むことができた。活動のエリアも広いため、存分に活動量を確保することができた。最終日には全員で種を蒔き、無事に芽が出ることを祈った。
	町内会長さんをはじめとする地域の方々、盛岡市役所、グリーンバンクの多大なるご支援のおかげで、無事に花壇と柵を完成させることができた。今後さらに花壇を設置し、展望台の塗装にも取り組む予定である。 休日などに現地を訪れた保護者の多くが、生徒の働きに驚き、感動していた。お世話されるという受身的な立場が多かった子ども達が、地域に貢献できる活動に取り組んだことが嬉しいという感想をいただいた。

資料 授業実践の取り組みの様子

嬉しそうに話し、町内会長さんと二人で一緒に、ふるいに土をかける仕事を行うなど、意欲的に働く姿がみられ、会長さんにも喜んでもらいたいという意識をもって取り組むことができていた。

- ・ やりがいや目的意識をもって作業に取り組むことで、教師や生徒間のかかわりも活発なものとなった。また、次々と作業を進めたいという意欲から活動への要求や報告をしたり、他の生徒の様子を見て励みにし、仲間を応援するといった様子が見られるようになった。

②【自ら行動する力に関して】

- ・ 仲間が蝶ヶ森展望台に花壇を作り、展望台が整備されていく様子を喜びを感じ、意欲的に芯材を切る作業に取り組むことができた。
- ・ のこぎりで芯材を切ることの必要性を理解し、たくさん切ることに喜びを感じながら時間いっぱい芯材を切ることができた。
- ・ 花壇杭ユニット（5本の連結した杭）作りの工程を繰り返すことで、作業の進め方を理解し、ほぼ一人で活動を進めることができた。
- ・ 日頃から訪れている場所が、きれいに変わっていくという今回の単元は、期待感や見通しがもちやすかったため、それぞれが自分の力を発揮することができたり、自分の役割を理解し最後までやり遂げることができた。また、完成した最終日の様子を見ると、大規模なものを全員で力を合わせて作り上げるということに、達成感を感じることもできた生徒も多かった。

③【社会資源を活用する力に関して】

- ・ 建材店への買い物では、材料購入の必然性を理解し、目的意識をもって活動することができた。帰りには、道路の端を進むように意識しながらリヤカーを引くことができた。
- ・ 種苗店の中では、マナーを守って行動することができた。蝶ヶ森や店舗への移動時の道路歩行では、中央を歩いていると自分から「あ、端っこ歩こう。」と話しながら行動するなど、安全に対する意識が芽生えてきていた。
- ・ 草取りの活動では、仕事の仕方を理解し、自分から草がある場所を見付け、時間いっぱい活動に取り組むことができた。また、自主的な活動

を促すための教師の直接的な働き掛けはほとんど必要なく、夢中で取り組む姿が見られた。

- ・ 今回の単元では、町内会長さんや盛岡市役所の公園みどり課の方、地域の店舗の方といった学校以外の方々と接する場面を設けたため、それらの方々が、自分たちと同じように蝶ヶ森をきれいにするための、目的を共有できる人々であるという意識をもつことができる生徒もみられた。このことにより、積極的にあいさつをしたり、共に活動することに喜びを感じたりすることができた。
- ・ 必要に応じて地域の店舗を利用することで、自ら進んで店員さんとかかわり、お金や商品のやり取りを行うことができた。また、道路の歩行も含めて社会資源の活用の仕方を知り、状況に応じた行動ができるようになってきた。

(2) 有効と考えられる支援の手立ての検証

教育環境として、社会的環境に包括されている

- ①「人的環境」と、②「物理的環境」の整備について検証していくことにした。

①【人的環境の整備に関して】

- ・ 人的環境として、教師が指示的な声掛けではなく励ましの声掛けを行ったり、作業の途中で進行状況についての話題などを行ったことにより、生徒の意欲を高めることができ、主体的な姿をみることができた。
- ・ 町内会長さんや盛岡市役所の方、お店の方といった人々との直接的なかわりがあったことにより、生徒にとって活動が社会的にも有意義なものであることの意識を高め、活動への意欲や真剣さが増した。また、生徒によっては、コミュニケーション面での力を発揮する機会となった。

②【物理的環境の整備に関して】

- ・ 地域の社会資源を大々的に活用した単元として、地域の公園をきれいにするというテーマ設定は、身近な公園が自らの手によってきれいに変わっていく様子が分かりやすく、生徒のやりがいや主体的な取り組みにつながるなど有効であった。
- ・ 必要な材料等の購入といった明確な目的をもつ

て店舗を利用することで、主体的に行動することができた。

- ・場の設定について、校舎の作業室と蝶ヶ森山頂という全く異なる場所で活動することとしたが、生徒にとって活動しやすい場として工夫を図りながら、自主的に活動場所を選択したことにより、生徒一人一人の力を発揮することにつながることができた。
- ・これまでの取り組みと同様に、一人一人に合った教材・教具の作成、工具や道具の選定を行うことで、主体的な取り組みを支え、それぞれが十分にもっている力を発揮することができた。

5. 単元のまとめと考察

本単元では、人的環境として地域の町内会長さんや盛岡市役所の方々、物理的環境としては蝶ヶ森という自然環境、店舗、学校の作業場といった、より現実的な社会と必然的にかかわることができるような社会的環境の整備を目指したテーマ設定を行ってきた。このことが、地域の方々、盛岡市役所、保護者の方々からも、生徒の行う花壇づくりが期待され、意義ある価値の高い活動に自分たちが取り組んでいるという、活動への意欲ややりがいにつながり、学習の主体者である生徒の力の発揮に大きく関与したものと考えられる。

このことは、ESDの目標でもある「1 すべての人が質の高い教育の恩恵を享受すること。」「2 持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれること。」の達成につながり、生徒の社会生活力の育成にもつながる成果であったと考える。

また、これまでの単元と同様に、繰り返し活動に取り組むことにより、働く力が育まれ、以前よりも一人で行うことができる仕事量が増えた生徒も多くみられた。特に3年生は、これまでの生活単元学習の様子を振り返ると大きく成長し、体力面や技術面のみならず、リーダーシップを発揮し、積極的に活動に取り組むようになったといえる。

このことも、ESDの目標である「3 環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現でき

るような行動の変革をもたらすこと。」の達成につながり、高等部進学後の学習活動又は卒業後の就労に向け、進んで問題を解決し、主体的に行動する力の育成にもつながる成果であったと考える。

最後に、本単元を通して、生徒一人一人が活動の手順を理解できるようになり、各自の仕事量も増えてきたため、前述した成果を受けて、翌年度は、花壇の設置箇所をさらに増やし、活動期間も拡大するなど、持続可能な単元計画を生徒と共に立案しながら教育実践を行った。この持続した生活単元学習の実践は、生徒が活動へのやりがいや生きがいを求め、より大きな成就感を得られる教育実践となったことから、ESDの目標実現に向けて、教育実践例の少ない特別支援学校としての、ESDの必要性を示唆した取り組みとなったものとする。

注

- (1) UNESCO, "Education for Sustainable Development," Education for Sustainable Development Information Brief, April 15, 2004, p.1.
- (2) 「エンパワーする (empower)」又は「エンパワメント (empowerment)」という言葉は様々な文脈で使われる。ESDの文脈で語られるとき、次の解説などが参考になる。「エンパワメント：人間が自らの生に関する選択を拡大させるために、社会・経済・政治的な地位や影響力、組織的能力などを含む広義の「力 (Power)」を獲得すること。個々人の資質・能力そのものの向上のみならず、むしろその資質を発揮できるような社会・経済・政治・組織的環境の改善を意味する概念として議論されることが多い。」
国際協力機構国際協力総合研修所編著、『援助の潮流がわかる本』、国際協力出版会、2003
- (3) 『研究紀要第19集』、岩手大学教育学部附属特別支援学校、2007
- (4) 谷村佳則・高橋勉・最上一郎・田淵健・鎌田文聰・我妻則明・宮崎眞、『個々の教育的ニ-

ズにこたえ、社会生活力を育み支援していく
ための授業実践（1）－研究の経過とエンパ
ワメント概念の確定－』、岩手大学教育学部
研究年報、第66巻、2007、P1-11

- (5) 谷村佳則・田淵健・稲邊宣彦・我妻則明・鎌
田文聡・宮崎眞、『個々の教育的ニーズにこ
たえ、社会生活力を育み支援していくための
授業実践（2）－エンパワメントを生かした
授業づくりを通して－』、岩手大学教育学部
研究年報、第67巻、2008、P105-118